



### (4) 欧 文 誌

上 村 務†

#### 1. 経緯と現状

当学会の欧文誌 Journal of Information Processing (JIP) は12年前の1978年の4月に創刊されている。JIPの前身は、学会創立より2年後の1962年から1977年まで出版された英文誌 (Information Processing in Japan) である。英文誌は当時の学会誌に載った論文を著者の希望によって英文論文として翻訳し、年一回出版したもので、日本での情報処理研究の海外への紹介を役割としていた。英文誌は各号10~30編ほどの論文を掲載し、毎号1,000部が発行され、海外の主要機関を中心に無料配布された。

英文誌は18年間刊行されたが、70年代半ば以降には学会誌に掲載される論文数の増加にともなって、英文誌へ掲載される翻訳論文が増加したことや、それらの掲載時期がオリジナル和文論文の発表時期から大きく遅れるなどの問題により、新しい方式への要求が強くなった。これに応じて、新しく季刊としてJIPを創刊し、

オリジナルの英文論文掲載を中心とすることで、学会誌とは独立させるに至った。JIPの目的は、英文誌のそれを引き継いで発展させるというもので、やはり日本の情報処理研究の海外への紹介である。当時、大野豊先生を中心に欧文誌編集幹事会及び編集委員会が作られ、創刊から2年間の編集が行われた。その後の編集はほぼ現行の体制で行われるようになった。すなわち学会の先任理事が委員長、後任理事が副委員長で、編集委員は担当分野や所属を考慮した10数名の専門家による体制である。編集委員会は月一回程度の頻度で行われ、論文の査読状況の管理、査読結果に基づいた採否の決定、特集や招待論文依頼などの企画や管理遂行を主な活動としている。

図-1, 2は、創刊より各年度の発行部数と、発行部数の会員数に対する割合を示したデータである。発行部数についてはしばらく1,000部という状態であったが特にこの1~2年上昇の傾向を示している。創刊号は2,000部の発行であるが、これは無料進呈、広告用として作られ

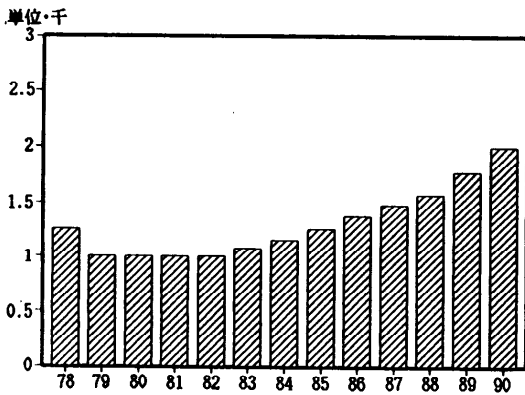


図-1 平均 (各号当たり) 発行部数

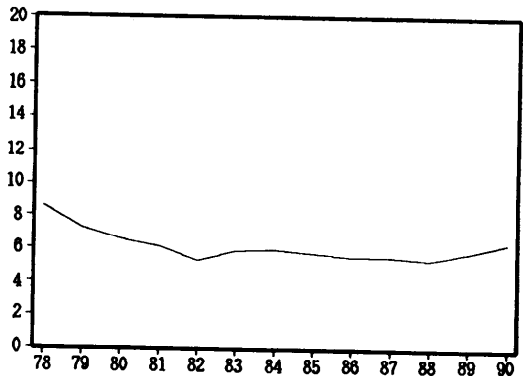
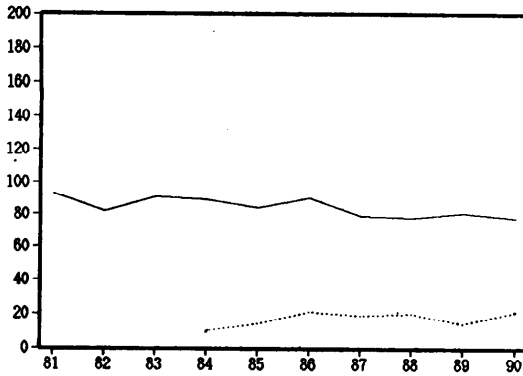
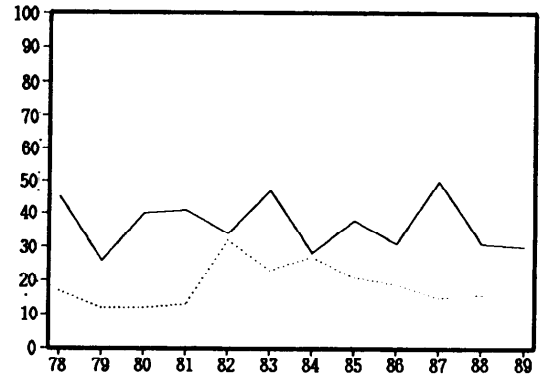


図-2 発行部数/会員数 (%)

† 本会理事 日本IBM(株)



— 非会員 …… 海外在住会員  
図-3 平均海外発行部数



— 投稿数 …… 掲載数  
図-4 年間論文数  
(招待論文を除きショートノートを含む)

たためである。最近の発行部数の増加は会員の伸びに支えられていると言える。

図-3は、各号当たりの平均の海外発行部数の推移である。当初から海外贈読数は最大の問題点の一つで、これは現在でもきわめて低い水準で、進展がみられていない。これでは日本人がせっかく英語で投稿しても、読者のほとんどは、国内の読者という現状である。この点を改善すべく過去にIFIPでの宣伝のための無料配布、出版社のカatalogへの広告掲載など試みられたが目に見える効果となっていない。ただ、こうした試みは比較的最近のことで、以前は試みがほとんどない状態であった。

図-4は、各年度における投稿論文数、及び掲載論文数の推移を示したデータである。投稿論文数についてはきわめて低いレベルであり、近年の会員の増加が投稿論文の増加につながっていない。論文の質を定量的に論議するのは難しいが、少なくとも現状の数倍のレベルの投稿数がないと優れた質を維持する論文誌とは言えない。ただ査読の様式や査読をお願いする方々は和文論文誌とはほぼ共通で、JIPの採否の決定が和文論文誌に比べて甘くなっていることはないと思う。外国からの投稿については、しばしば論議になるが、現行の規定では著者は当学会員でなければならない、現実には外国研究者による論文はきわめて少ない状況である。また投稿

料に当る別刷代の購入の義務付けも、投稿促進のために廃止する必要性がしばしば議論されるが、学会の財政事情を考慮してまだ実現に至っていない。

JIPは季刊であるが、各号の発行時期が必ずしも定着していないのも好ましい状況ではない。この原因は学会が出版を行っているため、専門の出版社に比べて体制が十分でないため、たとえば英文査読などで時間がかかりすぎ刊行が遅れることがしばしばである。また編集の際もこの“隔通性”に依存し、準備が不十分な場合には刊行をくり下げることがあった点を反省せざるをえない。過去には、たとえば昭和61年の3月と4月の2カ月の間に三つの号が刊行された例もある。こうした状況を考えて、専門の出版社に依頼する案も過去には討議されたが、編集、出版の自由を確保するという考えが強く実現していない。

## 2. 改善の方向と施策

こうした状況はかなり深刻なもので、改善には抜本的な方法が必要である。編集委員会では前委員長の堂下先生の時期よりいろいろな改善策を討議している。その主要なテーマや改善の方向について簡単に述べてみたい。ただし以下で述べる案や、考え方については現在の理事の方々や編集委員会の意向を反映しているものも

多いが、基本的には著者による整理と個人的な意見として考えていただきたい。

最も基本的な問題は JIP のあり方に関する点である。従来の位置付けは冒頭で述べたとおり、日本の情報処理研究の海外への紹介であるが、現状では決して成功しているとは言えない。改善の方向として現在二つの方向が考えられる。

一つは JIP を国際的な論文誌とする方向である。このためには質の向上、掲載論文のスキープの明確化、編集及び出版の体制などを大きく変える必要がある。質の向上のためには、優れた研究者による Editorial board を構成し、分野ごとに担当者を決めて質を維持する責任をもってもらう必要がある。委員長も選挙で一年ごとに変えるのではなく、長期にわたって方針を確立し運営できる方をお願いする必要がある。査読については国内の研究者のみならず広く世界中の研究者に行ってもらい体制が望ましい。スキープについても十分な討議が必要である。非常に広い分野を対象としたジャーナルがどの程度有効であろうかという疑問を十分に検討する必要がある。Journal of ACM の例も考えられるが、ACM の Transactions が作られてから JACM のスキープがかなり理論計算機科学に近くなっていると思う。さらに本当に国際的にするには、日本の技術などには限らずもっと普遍的なものにし、投稿も会員に限らずだれでもできるようにし、投稿料も廃止するのが望ましいと思う。また、出版も専門出版社と共同で行うほうが確実な出版体制という点で望ましいと思う。そうなるともはや一学会で行うよりも、他の学会と協力して優れたジャーナルを作ることを目指すほうが成功の可能性が高いと思う。モデルとしては物理学会と応用物理学会が共同で出版している Japan Journal of Applied Physics が考えられる。電子情報通信学会やソフトウェア学会は現在、独自の方策を推進中であるが、こうした可能性を深める努力を行う時期にあると思う。

二つ目の方向としては JIP を研究に限らず広

く日本の科学技術を海外に紹介する役割として位置付けることである。今までの背景より論文中心となろうが、特定の分野の紹介記事や特集号を企画していくことで日本の技術の現状や方向を紹介する色彩を強く出していく方向である。このモデルとしては、たとえば日本の技術を対象にした IEEE Computer のようなものが考えられる。これを押し進めていくと、一般投稿論文の扱いをどう位置付けるかを明確にする必要がある。査読の基準を高くして優れた論文のみを Research Section のような枠を作って掲載することなどが考えられよう。

この二番目の方向は現在の体制でも試みることができる方向であり、実際にここ1~2年そうした方向に向かい努力を行っている。具体的には特定の分野の論文や紹介記事を集めた特集号の企画や、研究会との共同でワークショップやシンポジウムからの優れた論文をまとめて JIP に載せる企画が進んでいる。また日本の研究を代表するような優れた論文を和文誌から翻訳して載せたり、当学会のイベントで行われた広く関心を呼びそうな外国人による講演の掲載なども考えている。IEEE Computer とは異なり一般投稿論文の占める割合が多いが、今までとはかなり性格が変わっていくと思われる。

海外からの購読の促進のためには内容の充実を進めるとともに、積極的に PR を行う必要がある。編集委員会としてもいろいろと検討しているが、現実にはなかなか容易ではない。ある出版社によれば、数千部の規模で無料コピーを作り適当な箇所に2年くらいサンプルを送り続けたり、主要な国際会議などで配布することを繰り返す必要があるとのことであるが、それは財政的及び組織的な点で難しい。ACM や IEEE は会員に限らず多くの個人や団体に関するデータベースをもっており、必要なターゲット層の情報や郵送リストなどが容易に作れるとのことである。残念ながら当学会にはこうしたデータベースは存在しないし、これから自前で作るには相当の時間がかかる。しかし JIP に限らず当学会の国際的活動を進めていくうえでこ

うした情報は非常に重要で、これからはそうしたデータベースの活用などの技術を学会の中で蓄積していく必要性を強く感じている。

現実的な方策としては、現在 ACM や IEEE との協力関係を進めて彼らのチャンネルを活用したいと思っている。具体的には Communications of ACM と IEEE Computer に JIP の広告を掲載することを進めている。また郵送リストの入手なども考えているが、技術的に解決すべき問題が多くまだ実現に至っていない。このほかに、パンフレットや申込書、サンプルコピーなどを主要な国際会議で配布することも進めている。具体的には昨年の IFIP の会議や海外での Book Fair などですうしたことを行っている。

編集出版体制についても議論は活発であるが、現状を大きく変える段階には至っていない。前述のように専門出版社への委託は当然考えられるが、自主性の問題や慎重論もあり、具体的な提案には至っていない。ただ海外への組織的な PR の点からも適当な出版社との協力関係の検討は進めるべきだと思う。編集体制についても可能な改善を進めていく必要がある。定期発行の上で問題となっていた英文査読については、今年より英文の質についても返戻の理由となりうるなど著者への英文の質の要求を高めるとともに、英文査読者を二人にして迅速な対応を目指すようにしている。また従来よりも各論文に対する責任を明確にし、扱いを迅速かつ公平にする目的で、今年度より各論文に対する担当編集委員を設けることにしている。

### 3. おわりに

あまりまとまりのない内容になってしまったが、それは現在 JIP の明確な方向を打ち出してそれに向かって体制を整えているというよりは、いろいろな可能性が議論され、現実的な範囲で改善しようという現状を反映しているせいであると思う。個人的には国際的な論文誌を他学会と共同で出版する方向が望ましいと思う。しかしながらただちにというのは現実的ではなく、二番目の日本の技術紹介を位置付ける方向は試みる意義があると思う。海外からの日本技術情報入手に対する要求は高いことを考えると、学会によるこうした出版物の果たす役割は大きいと考えられるからである。海外への PR などは過去にほとんど試みられなかったことを考えると、現在の PR をこの方向を前提として進めて、その効果を確認したいと考えている。編集体制についてはこの方向を進めるかぎりでは現在の体制の改善ということで対処できよう。さらに出版社との共同については検討を進める努力が必要であろう。ただこの方向の促進もまずは2～3年程度の期間と区切り、その間での進展状況によっては一番目の方向への本格的な努力に踏み出す必要がでてくることも十分に考えるべきだと思う。会員のかたがたには、こうした英文誌の現状を認識していただき、改善のための批判や積極的な提案をお寄せいただければ幸いである。